

〈研究ノート〉

## 日・中両民族の雷神思想の源流（その一）

李 均 洋

はじめに

神話は人類文化遺産中の最古のものであるが、学問として研究されるのは近代以来のことである。にもかかわらず、神話学では進化論派、伝播派、効能派、歴史派、心理分析派、形式主義（分類学派とも称される）、構造主義、象徴派などが相次いで出現した。これらの流派は欧米の神話学者の研究軌跡を現した。それに対して、欧米以外の学者は各自の学問長所を生かして、自国及び世界神話に独創的な研究業績を挙げた。

本稿は中国と日本の雷神思想の源流について比較研究を行い、大方の教示を乞おうとするものである。

### 一、因果観の雷神信仰起源

『日本永代蔵』巻四の「茶の十徳も一度に」は次のような因果物語を述べている。

越前の国敦賀の港の町はずれに、小橋利助と言われる利口な人物がいた。この人は人より早く朝市の立った町に出て、「恵比寿の朝茶」を売り出した。日毎に儲かり、ほどなく元手をこしらえて葉茶店を手広く始め、その後は大勢の手代を抱えて大問屋となった。

そののち人の道はずれた悪心がおこり、越中・越後に手代をつかわし、どうせ捨てられる茶の煮殻を買い集め、それを京の染物に使うのだと称したが、実は飲茶にこれを混ぜて人知れずこれを商ったので、一度は利益を得て家も繁盛した。しかし天がこれをとがめ給うたのか、この利助はにわかに狂人となって、自分からわが身の悪事を国中に触れ回り、そのため、人のつきあいも絶え、医者を呼んでも来る人がなく、おのずと身体もしだいに弱って、湯水も喉を通らなくなり、最後に金銀にしがみついて死んだ。その死骸を乗物に押し込み、火葬場に送って行くと、頃は春ののどかな日だったにもかかわらず、忽ち黒

雲がまきおこり、車軸を流すような豪雨が平地に川を流し、風は枯木の枝を吹き折り、雷火がひらめき落ちて利助の死骸を煙にする前に奪って行ったのか、からの乗物のみが残っていた。まのあたりにこの火宅の苦しみを見て、人々は逃げ帰り、皆殊勝な仏心を起こしたのだった。

これとよく似ている中国の因果物語がたくさんある。一例をあげてみよう。

『鉄困山叢談』巻四中の「謝秀才はいつも小量輕権で人に貸し与え、必ず大器巨秤で償還を命令したので、雷に打たれて死んだ」が最もよく似ている。

明末馮夢龍（一五七四～一六四六）が編纂した「三言」（『喻世明言』、『警世通言』と『醒世恒言』）及び同時代の凌蒙初（一五八〇～一六四四）が編纂した「二拍」（『初刻拍案驚奇』と『二刻拍案驚奇』）にもこの因果応報の倫理思想は随所に見える。このうちの『初刻拍案驚奇』第三五話中の言葉によると、「人の世の財貨には、それぞれみな定めというものがある。もしもあなたの物でなければ、たとえ無理にだまして手に入れても、結局は間違いない元の人に返さなければならぬ故、昔から因果応報の話は一つや二つではない。これを全部話し切れるものではないが、まず次の奇談を取り出して『まくら』と致そう」とある。

日・中近世文学においては善悪因果応報の倫理観は「雷」（雷神）が善悪を司ることを媒介として展開しているのである。

こういう雷神思想は仏教説話（例えば、中国の地獄説話「善悪の秤」、日本の八二二ごろ成立した『日本靈異記』中の因果応報説話）と係わりがあるかもしれないが、その源流は神話にある。

中国の雷神と言えば、まずは必ず楚国の大詩人屈原（前三四三～前二七七）の『楚辞・遠遊』を読まなければならない。必要な部分を抜き書きしてみる。

召<sub>レ</sub>豊隆<sub>二</sub>使<sub>レ</sub>先導<sub>一</sub>兮 豊隆の神を召して先導させ

風伯<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>余先驅<sub>一</sub>兮 風伯の神がわがために先駆すれ

左<sub>二</sub>雨師<sub>一</sub>使<sub>レ</sub>徑待<sub>一</sub>兮 雨の神には左から徑をとらせ

右<sub>二</sub>雷公<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>衛<sub>一</sub> 雷の神は右に控えさせて護衛と

する

「豊隆」について、後漢・王逸の注には、「豊隆は雲師なり」とある。

しかし、北魏の酈道元の『水経注・河水』には違った記載がある。

「穆天子伝」にいわく、「天子昇<sub>レ</sub>於崑崙、觀<sub>レ</sub>黄帝之宮、而封<sub>レ</sub>豊隆之葬。」と。「豊隆」とは、雷公なり。

「風伯」即ち風神であり、「飛廉」とも言われる。

「雨師」即ち雨神であり、「萍翳」・「屏翳」・「玄冥」などとも呼ばれる。

『山海経・大荒北経』には次のように記されている。

蚩尤作兵伐黄帝。黄帝乃令应龙攻之冀野。应龙畜水，蚩尤请风伯雨师，纵大风雨。

また、『山海経・海外東経』は雨師の形象の描写を次のよう  
におこなっている。

雨師（妾）在其北。其为人黑，两手各操一蛇，左耳有青蛇，右耳有赤蛇。一曰，在十日北，为人黑身人面，各操一龟。

この描写で注目すべきは「青蛇」と「赤蛇」である。青は中国の古典に「陰」の代名詞であるが、赤は「陽」に属する。

雷公については、『山海経』などの古文獻の記載が一番詳細である。次に要点を挙げてみる。

『海内東経』の記事より

雷沢中有雷神、龍身而人頭、鼓其腹。在吳西（清・吳承志『山海経地理今釈』卷六曰、「雷沢即ち震沢。『漢志』は具沢を会稽郡吳西に位置せしめている。揚州藪は古文に震沢と為される。震沢が吳西にあるということは証される」今人袁珂は、震沢即ち現在の太湖、と解している）

『大荒東経』の記事より









東海中有流波山。入海七千里。其上有獸。状如牛、蒼身而無角、一足。出入水則必風雨。其光如日月、其声如雷。其名曰夔。黄帝得之、以其皮為鼓、夔以雷獸之骨（東晋郭璞の注には、「雷獸即ち雷神なり」という）、声聞五百里、以威天下。

この「状は牛の如く」、「水に出入すれば則ち必ず風雨あり」という夔は、雷神と何の関係があるのか。『淮南子・覽冥訓』の文を引用してみよう。

往古之時、四極廢、九州裂、天不兼覆、地不周載、火熾炎而不滅、水浩洋而不息、猛獸食顛民、鷙鳥攫老弱。於是女媧鍊五色石、以補蒼天、斷鼇足、以立四極、殺黑龍、以濟冀州、積芦灰、以止淫水。蒼天補、四極正、淫水涸、冀州平、蛟虫死、顛民生。

殺された黒龍とは、即ち状は牛の如き夔である。

龍身の雷神、牛の如き蒼身の夔、殺された黒龍三者は、みな雷神の神格を持っていて、みな雷神だと言えるであろう。

文字から言えば、雷の古文（秦代以前につかわれた書体の文字）はと書かれている。真ん中のは雲紋、四隅のは『大荒東経』に記載された「其の皮をもって鼓を為り」の鼓である。またとも書かれている。夔は雨であり、即ち雷である。またとも書いたが、は稻妻である。籀文（周の太史籀の作った書体とされている。大篆とも言われている）の雷はと書かれ、即ち雲・雨・稻妻・雷声など合わせて雷になったのを表す。

さらに、後漢の許慎は『説文解字』に雷を次のように述べた。雷、陰陽薄動生レ物者也、從レ雨、雷象レ回転形。

これについて、清人段玉裁は、「薄、音博、迫也、陰陽迫動、即謂雷也、迫動、下文所謂回転也、回、生万物者也、二月陽

盛、雷発<sub>レ</sub>声、故以<sub>レ</sub>晶象<sub>ニ</sub>其回<sub>レ</sub>転之形、非<sub>ニ</sub>三田<sub>一</sub>也。」と注した。

なるほど、前掲の『海外東経』が描写した「雨師（中略）左耳有<sub>ニ</sub>青蛇、右耳有<sub>ニ</sub>赤蛇」の「青蛇」と「赤蛇」は、『淮南子・天文訓』が言う「陰陽相薄、感而為<sub>レ</sub>雷」の陰陽なのである。

ここで屈原の『遠遊』に戻ろう。屈原に描写された「豊隆」・「風伯」・「雨師」・「雷公」は、もともと一つの神であり、即ち雷神である。後世に言われるいわゆる三十六雷部・風伯・雨師・電母などは、みな雷神から派生したものである。

では、もともと「雷沢」水域に居た「黒龍」は、何時から天空を飛ぶようになったのか。

## 二、雷神思想の源流

まずは人々に愛読される屈原の『九歌・雲中君』から始まる。「九歌」とは、本来は中国南方の古代歌謡をいい、屈原の『九歌』は楚国地方の民間祭神の巫歌を材料として創作したものである。侗族出身の伝承説話学者林河氏の現地調査研究によると、本来の『九歌』は絶世の美女である女巫が男神に詔うための祭神詞で、その基本形式は女巫と男神との情歌唱和である。「九歌」の一つである『雲中君』は雷神を祭る際の女巫と雷神との唱和である。まず女巫が登場する。

浴<sub>ニ</sub>蘭湯<sub>一</sub>兮木<sub>レ</sub>芳  
蘭湯に浴し香ぐわしき水に髪あら

華采衣兮若<sub>レ</sub>英  
色もあやなる衣は花びらのごとく

（巫の装束）

靈連蜷兮既留  
雲神はうねりつつ来て留まり

爛昭昭兮未央  
きららかに輝きてやまず

次に雲中君が稲妻と雷鳴を伴って、雲に乗って登場するが、彼は絶世の美女の女巫の色香にあまり感動せず、威風堂々と歌う。

蹇將<sub>レ</sub>憺兮寿宮  
あわが祭りの庭に安んじて

与<sub>ニ</sub>日月兮齊<sub>レ</sub>光  
日月と共に輝きたもう

龍駕兮帝服  
龍の車にのり天帝の衣着て

聊翔遊兮周章  
しばしままかけりめぐりたもう

雲中君が登場したとき、女巫は自分の容色で彼を感動させられる、と自信満々だったが、思いがけずに雲中君は降臨することを途中でやめ、稲妻の光りに従って雲の中に戻ってしまう。女巫はしかたがなく、世人に歌って説明する。

靈皇皇兮既降  
神は煌々として降り

焱遠<sub>ニ</sub>挙兮雲中<sub>一</sub>  
またたちまち雲中とおく飛び去れ

雲中君は傲慢そのもので、自分の龍車と帝服を自慢し、誇示するだけである。

覽<sub>ニ</sub>冀州兮有<sub>レ</sub>余  
冀州の外まで見渡して

横四海兮焉窮 四海のはてまで飛翔するか

この無情な男に対して、女巫は愛情を持って憂鬱な思いを歌う。

思夫君兮太息 かの君を思うて嘆きの息を吐き

極勞心兮憊憊 心をなやまし胸をいためり

「龍駕兮帝服」の句は雷神の龍との関係と雷神の神格の高さを明示する。長沙馬王堆西漢墓から出土された「符禁」帛画（前二世紀）もこの点を明らかにしている。その帛画では、雷神は天帝東皇太一の左下側に居り、天帝に次ぐ高い神格が示されている。

正史を見ると、中国の最古の通史である司馬遷の『史記』は、黄帝を有史以来の初代皇帝とし、以下、顓頊・帝嚳・堯・舜と列べている。「五帝本紀」には「黄帝者、少典之子、姓公孫、名曰軒轅（後略）」と書かれている。

黄帝の名号の由来について、『太平御覽』巻七九は「帝王本紀」を引いて曰く、

黄帝、有熊氏少典之子、姬姓也（中略）受国於有熊、居軒轅之丘、故因以為名、又以為号。

また、『太平御覽』巻七九は「河図握巨」をも引いている。

黄帝名軒（中略）母地祇之女附宝。

黄帝の母附宝が黄帝を生んだことについて、『玉函山房輯逸書』は「河図稽命徴」を輯している。

附宝見大電光繞北斗權星、照耀郊野、感而二十五日、

而生黄帝軒轅於青丘。

これらの記載によって黄帝の神格が雷電と関係があるのがわかる。

「軒轅之丘」については、『山海経・西山経』に次のように述べてある。

玉山（西王母の居る山）：又西四百八十里、曰軒轅之丘

（郭璞注「黄帝居此丘、娶西陵氏女。因号軒轅丘」）：が、『海外西経』にはこれと異なる記載がある。

軒轅之国、在此窮山之際（郭璞注「其国在山南边也」。

大荒経曰、眠山之南）其不寿者八百歳。在女子国北。人

面蛇身、尾交首上。窮山在其北。不敢西射。畏軒轅之

丘（言敬畏黄帝威靈、故不敢向西而射也）。在軒轅

国北。其丘方、四蛇相繞。

中国の神話学者瀟兵氏は比較神話学の角度から、「この丘（軒轅丘）は一つの禁地であるが、人々が『敢て西射』しないからである。四蛇が生命樹を守る四面神のようなケルビムと同じである。」と指摘している（『中国文化之精英——太陽英雄神話比較研究』、上海文芸出版社、一九八九年、五六八頁）。

筆者はこの蛇が黄帝神話の元型であると考えている。すなわち黄帝は『海内東経』に記載される「龍身而人頭」という雷神と関わりがあると思う。次の記載を見てみよう。

軒轅、主雷雨之神（『離騷』北宋洪興祖補引『春秋合誠

図』）。

昔者黄帝氏以<sub>レ</sub>雲紀、故為<sub>二</sub>雲師<sub>一</sub>而雲名（『左伝』昭公十七年）。

黄帝以<sub>二</sub>雷精<sub>一</sub>起（『河図帝紀通』）。

軒轅十七星在<sub>二</sub>七星北<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>龍之体<sub>一</sub>、主<sub>二</sub>雷雨<sub>一</sub>之神（『大象列星図』）。

軒轅、黄龍体（『史記・天官書』）。

陰陽交感、震為<sub>レ</sub>雷、激為<sub>レ</sub>電、和為<sub>レ</sub>雨、怒為<sub>レ</sub>風、乱為<sub>レ</sub>霧、凝為<sub>レ</sub>霜、散為<sub>レ</sub>露、聚為<sub>レ</sub>雲、氣立為<sub>二</sub>虹・蜺<sub>一</sub>、離為<sub>二</sub>背・裔<sub>一</sub>、分為<sub>二</sub>抱・珥<sub>一</sub>、此十四變皆軒轅主<sub>レ</sub>之（『太平御覽』卷六引『天文録』）。

これらの記載によると、軒轅は風・雨・雷・電を司る雷神であるが、天における星座は「黄龍体」である。

中国の龍信仰は何時から始まったのか。いまだにまだ一つの謎であるが、一九九四年四月三日の新華社電訊は、揚子江沿岸の湖北省黄海県から、六千年前の全長四・五メートルにも達する龍の石像が発見されたと伝えている。つまり中国の龍信仰は少なくとも六千年以上の歴史をもつ。

地理学者安田喜憲氏は、「八五〇〇〜八千年前に現在と類似した気候・植生環境が確立したことを示す花粉分析の結果は、地中海沿岸（Bottema and Woldring 1986）、中央ヨーロッパ（Kuster 1986）、北欧（Hyvarinen 1976, 87）などユーラシア大陸の各地で広く報告されるようになった。日本列島でも、この八五〇〇〜八千年前を境として、ブナ属が北緯四〇度以北の本

州にも拡大し、温帯の落葉広葉樹林の生育に適した海洋性気候が確立した時代に相当していた」と指摘している（『気候と文明の盛衰』、朝倉書店、一九九〇年、三二四頁）。


考古発現によると、中国の植生環境の下限がわかる。七千年前ぐらいの浙江省における河姆渡新石器時代の遺跡から、米・粳・稻葉・稻茎が多量出土した。河姆渡遺跡の北方、太湖周辺の羅家角遺跡（浙江省桐郷県）は、河姆渡文化に近い年代のもので、同様の遺物を出土している。米は五・二七％が粳稻（短粒米）、六四・七四％が粳稻（長粒米）である（辛士誠の報告、『百越民族史第五屆學術討論會論文』、同名論文集を参照した）。

中国の龍信仰は海洋性気候とその下での農作文明の発展と密接な関わりがあると考えられる。

『説文解字』十一には、「龍、鱗虫之長、能幽能明、能細能巨、能短能長、春分而登<sub>レ</sub>天、秋分而潛<sub>レ</sub>淵。」とある。衆知のように、龍は古代の人々の想像から出た神聖動物であり、「能幽能明、能細能巨、能短能長」と形容される。これは想像の特徴を表すが、「春分而登<sub>レ</sub>天、秋分而潛<sub>レ</sub>淵」とされる動きは、何らかの自然現象を表していると考えられる。

次に唐代の類書『芸文類聚』巻二に引かれている『華陽国志』の記載を読んでみよう。

雷於<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>為<sub>二</sub>長子<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>其万物為<sub>二</sub>出入<sub>一</sub>也。雷二月出<sub>レ</sub>地、百八十日、雷出<sub>レ</sub>則万物出<sub>レ</sub>。八月入<sub>レ</sub>地、百八十日、雷入<sub>レ</sub>則万物入<sub>レ</sub>。

龍の「春分而登<sub>レ</sub>天、秋分而潛<sub>レ</sub>淵」という動きは、雷の「二月出<sub>レ</sub>地、八月入<sub>レ</sub>地」と対応する。このように考えると、雷を示す古文の文字「」字の真ん中の雲紋「回」は、清人段玉裁が「回<sub>レ</sub>生万物<sub>レ</sub>者也」と注釈したように生万物を回す者としての雷そのものを示すものと考えられる。

大和岩雄氏は『エジプト・アイルランド・中国の渦卷文』について、つぎのように論述している。

中国の場合ほとんど渦卷文（中国では「渦文」と書く）なのに、周の青銅器では雷文になっている。彩陶土器と青銅器の施文では、技術上に大きなちがいがあがる。青銅器のほうがむずかしい。そのむずかしい青銅器では渦卷文が雷文になっているのは、ケレーニイが晩年の見解として述べている技術上の易しさによっているのであろう。（中略）したがって、中国の渦卷文・雷文は同じ表現意図によっており、「氣」の表現と違ってよいであろう。『世界美術辞典』（新潮社、一九八五年）も、中国の「雷文は空中の気ないしは生命力の象徴とする解釈がある」と書いている。気は天地に充滿しているが、戦国（紀元前四五一〜前二二一）末期の『呂氏春秋』には、早春について、是月也。天氣下降。地氣上騰。天地和同。草木繁動。（孟春紀）とある。「氣とは人を含めて生きとし生けるものの生命現象」だから、生氣は早春に発動し、その発動は天と地が動くことから始まる。渦卷の中心が二方向に分かれた表現は、天氣と地

氣（もしくは水氣）をあらわしており、それがふたつ巴の陽（天）と陰（地・水）になったのである。（中略）『淮南子・原道訓』は、氣を定義して、「氣者生之充也」（氣とは生を之れ充たすものなり）といい、生命の充溢が氣だと書く。氣の表象が渦卷文なのだから、中国の渦卷文も、他の国と同じに、生命力・生成力・再生力の図像表現が渦卷文である（『東アジアの古代文化』一九九五年春・八三号、大和書房、一七六〜一八一頁）。

『淮南子・原道訓』が述べた「氣とは生を之れ充たすものなり」という「氣」は、非常に幅広く、また奥深い古代哲学の一つ範疇であり、宇宙万物における有形（天地日月山水草木）と無形（心理活動や道德修養など）の全ての事物を包括している。この点から言えば、大和氏の「氣」についての補充説明は十分と言えないのであるが、確かに氏の指摘したように、「氣」は生命力・生成力・再生力の内容を含んでいる。

この「氣」はどこから来たのか。清人段玉裁が注釈しているように「陰陽迫動」から来たのである。「迫動」即ち「回」である。

これは雷に対する宇宙論的な思考であるが、この思考は龍という観念的、想像的な神聖動物とともに発生したと考えられる。雷は実在する自然現象であり、声も形（電光）もある。そしていつも風・雨・雲とともに出現する。しかし、古代人が雷を神として崇拜するとき、その音、その形及び雷が生む風・雨・雲のすべてが、神聖なものと思ったのである。人間社会の男女

が結合して子供を生むように、天と地が結合して雷を生むのである（「雷於天地為長子。」『太平御覽』卷十三引古本「書・洪範五行伝」）。『易経』によると、古代によく流行していた巫卜の語で言えば、天は乾、地は坤。「卦」の記号では天を「☰」、地を「☷」と書いて、至陽（最も純粋な陽）と至陰（最も純粋な陰）を表すものとする。雷は震、「卦」の記号では「☳」と書く。天と地の長子であり、天にも属し、地にも属すものとする。

具体的にいう、「往古之時」、雷神は「雷沢」において、「水に出入すれば則ち必ず風雨あり」、「水は浩洋として息まず」という有様だったから、このとき殺された（これはおよそ神話中の大洪水期であろう）。

しかし、農耕文明に入った後、雷神信仰はまた復活しただけではなく、「黒龍」の悪神的性格から、「天地之長子」という天と地に属する尊神に転身するようになった。即ち天に居て「乾」、地に居て「坤」の性格を持っている。

『礼記・月令』疏引『春秋説』はいう、「下為地皇（中略）曰神農。」と。

神農は『水経注』卷一八「渭水」に引かれた『帝王本紀』における炎帝神農氏である。即ち、「炎帝神農氏、姜姓。母女登遊華陽、感神而生炎帝、長於姜水。」

それに対して、『太平御覽』卷五三二には『礼記外伝』を引いて、「稷者、百穀之神也」とある。

後稷について、『山海経・海内経』に「帝俊生後稷」とあるが、『世本』には「姜原、是生後稷」とある。

中国古代では各部落ごとに信仰する農神があったかもしれないが、前掲の神農・後稷と黄帝は一つの神であると考えられる。論拠は三つある。

第一は、文字学から言うと、黄帝の「姬」姓と炎帝・後稷の「姜」姓は一音相通で、発音が近い。そして第二に、『淮南子・時則訓』高誘注には、「赤帝、炎帝、少典之子、号为神農、南方火德之帝也」とある。「火德之帝」、即ち黄帝と炎帝の出生はみな電光と関わりがある（「華陽」も「炎」も、みな電光の光りである）。

第三に、黄帝と炎帝はみな「沢」と「龍」に関わっている。

『西山経』はいう。

（前略）西望大沢、後稷所潜也。

また、『国語・周語下』はいう。

辰馬、農祥也（中略）後稷之所経緯也。

辰馬とは、房・心・尾の星座名である（文末の図1を参照のこと）。この星座には「犁頭星」（犁即ち耕地する道具）という俗称がある。『太平御覽』卷八八一引「龍魚河図」はいう。

天辰星主气司災、其精下為先農之神。

具体的に、軒轅黄帝は「黄龍体」である。これに対して、林巳奈夫氏に次の詳論がある。

（房・心・尾の並び方は）前二千年紀の晩期、殷時代の龍



の図像は図一三（文末の図2を参照のこと）の房、心、尾の星の並び方とあっている。その後年代が経ち、星の並び方と星座名の動物の形との対応がはっきりしなくなってきたものと思われる。（中略）六朝の晋の歴史を書いた『晋書』の天文の章に「軒轅の十七星は七星（星座名）の北にあり、黄帝の神で黄龍の体をもつ」とある。星の数が一七個という。図一四（文末図3）で龍の周囲に配せられた星の数は一六個である。一個足りないが、天文図ではないから画工が一個かき落とした、ということはできよう。しかし数はそれでよいとして、星の配置が実際の軒轅（図一五）とどう見ても合わない。これを東方青龍の星座を裏返した形とみる説もあるが、それでもこの星の配置と合わない。この図一四は星を見ると軒轅の星座と合わないが、龍の画像の方を見ると頭から尾までの屈曲の仕方が軒轅の星の並び方と大体合致している。図一〇・一二では星の並び方は天の星座と合い、龍の画像はそれとかかわりない形にえがかれているのに対して、図一四は龍の画像と星の並び方の関係がそれと反対になっている、ということになる。こういう方式もあった、と解してはいかがであらうか。

（『龍の話』中公新書、二七・三一頁図2、3は同書より転載）

言い替えば、神農は地神であるが、黄龍は黄帝という天神（天帝）の性格を象徴している。次の『淮南子・時則訓』の記載を読むと、この点がもっとはっきりする。

中央之極、自崑崙東絶<sup>スギ</sup>両恒山、日月之所<sup>レ</sup>行道、江漢之所<sup>レ</sup>出、衆民之野、五穀之所<sup>レ</sup>宜、龍門河濟相貫、以息壤<sup>ニ</sup>堙<sup>ニ</sup>洪水之州、東至<sup>ル</sup>於渴石。黄帝・后土之所<sup>レ</sup>司者、万二千里。

この中の后土は、即ち「地者（中略）其神曰<sup>レ</sup>祇、亦曰<sup>レ</sup>媪（中略）亦名<sup>ニ</sup>后土<sup>一</sup>」（『初学記』卷五引『物理論』）とされ、祇とは、「地祇、提<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>万物<sup>ニ</sup>者也」（『説文』）とされるものである。『淮南子』には五行思想が貫かれており、いまでも多数の不明点が残っているものの、前掲の記載については割合に分かりやすい。黄帝后土の時代とは大洪水時代後の農耕文化時代である。

この黄帝后土について、『淮南子・天文訓』に「中央土也。其帝黄帝、其佐后土（中略）其獸黄龍」とある。この「土」は五星（木・火・土・金・水）の土星を指し、「其帝黄帝」は黄帝が中央の天帝であることを指している。「其佐后土」即ち「黄帝的補佐は后土である」。これは注釈者の従来の説である。

この后土について、『左伝』（昭公二十九年）には「共工氏有<sup>レ</sup>子曰<sup>ニ</sup>句龍<sup>一</sup>、為<sup>ニ</sup>后土<sup>一</sup>」とあるが、『国語・魯語上』には「共工氏之霸<sup>ニ</sup>九<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>也、其子曰<sup>ニ</sup>后土<sup>一</sup>、能平<sup>ニ</sup>九<sup>ニ</sup>土<sup>一</sup>、故祀以<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>社<sup>一</sup>」とある（『風俗通義』曰、「社者、土地之主。」）。共工は何時九土を統一したかは、不明である。

后土の祖先について、『山海経・海内経』はこう述べている。

炎帝之妻、赤水之子、聽<sup>ニ</sup>託<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>炎居<sup>一</sup>、炎居生<sup>ニ</sup>節立<sup>一</sup>、節立生<sup>ニ</sup>戲器<sup>一</sup>、戲器生<sup>ニ</sup>祝融<sup>一</sup>（郭璞注、祝融高辛氏火正号）。祝融

降<sup>ニ</sup>処<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>江水<sup>一</sup>、生<sup>ニ</sup>共工<sup>一</sup>。

『海内経』の記載に対して、『大荒西経』はいう。

顓頊生<sub>レ</sub>老童、老童生<sub>レ</sub>祝融。

また、『海内経』中「黄帝生<sub>レ</sub>昌意、昌意生<sub>レ</sub>韓流、韓流生<sub>レ</sub>帝顓頊」によると、祝融は黄帝の子孫ということになる。

つまり、『山海経』の記載では、共工は炎帝の子孫でもあり、黄帝の子孫でもある。この矛盾について、袁珂氏は「黄・炎はもともと同族であるから、炎帝の子孫としての祝融と伝えてきたが、黄帝の子孫としての祝融とも伝えてきた」と解釈した（『中国神話伝説辞典』二九七頁）。これが妥当であると思う。

黄帝でも炎帝でも、また「九土が統一できる」共工でも、みな歴史伝説になった上帝であるが、「黒龍」・水神・雷神はかれらの性質と考えてよい。

さて、「后土」という農神はいったいどんな神徳をもっているか。次の記載がある。

其又於<sub>レ</sub>亳土、又雨。（『殷契逸存』九二八）

己未、卜、寧<sub>レ</sub>雨於<sub>レ</sub>土。（『殷虚書契後編』上・一九・七）

これらから、「后土」は農神（社神）であり、主な神徳は乞雨と止雨であることがわかる。

この神徳に応じて、天帝（天神）は同じ神徳をも持っている。

帝不<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>雨。（『卜辞通纂』三五六）

逆に、この神徳は黄帝后土の本来の性質が「黒龍」・水神・雷神であることを説明している。

従って、「景<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>土、三小宰、卯<sub>一</sub>牛、沈<sub>一</sub>十牛」（『殷虚書

契前編』一・二四・三）という祭儀が生じ、また「早則修<sub>ス</sub>土龍」（『淮南子・説林訓』）という祭儀もあった。

祭儀の目的は風雨和順を乞うものである。農業を根本とする社会に風雨和順は豊作を意味する。豊作は衣食充足を意味する。衣食の充足は「国泰民安」を意味する。これで后土・農神は社稷国土神になったはずである。これに応じて黄帝・天神もおのずと至高無上の天神になったわけである。

こうして見ると、人々は黄帝・后土に乞雨と止雨、さらにすべての天災人禍を取り去ることを願い、国家社稷の安泰・興亡をも寄託するようになったことがわかる。

秋、大水、鼓、用<sub>レ</sub>牲於<sub>レ</sub>社於<sub>レ</sub>門。（『春秋』莊公二十五年）  
鄭子産為<sub>レ</sub>火故、大為<sub>レ</sub>社、祓<sub>レ</sub>禳於<sub>レ</sub>四方、振<sub>レ</sub>除火災。（『左

傳』昭公十八年）  
国有<sub>レ</sub>大敵、天災、弥<sub>レ</sub>祀社稷<sub>一</sub>禱<sub>レ</sub>祠。（『周礼』春官宗伯

下）  
帝其降<sub>レ</sub>虜。（『卜辞通纂』三七六）

帝降<sub>レ</sub>食受<sub>レ</sub>又。（『殷虚文字乙編』五二九六）

惟上帝不<sub>レ</sub>常、作<sub>レ</sub>善降<sub>レ</sub>之百祥、作<sub>レ</sub>不善降<sub>レ</sub>之百殃。（『尚書・商書・伊訓』）

古典には、こうした記載がたくさんある。

前節に提出したもともと「雷沢」の水域に居た「黒龍」は、何時から天空を飛ぶようになったかという問題はこれで答えを得られる。

要するに、農耕文化以前の大洪水時代に黒龍信仰はすでに世間に流行っていた。そのときの雷神の主な神徳は「致<sub>二</sub>風雨<sub>一</sub>」である。農耕文化に入ってから、雷神信仰は龍信仰に進化した。つまり、人々は「蒼身而無<sub>レ</sub>角」、「龍身而人頭」の黒龍を飛行させるようになった（『説文』には「龍、龍也」とある。「龍」の上の部分の雷は古文<sub>レ</sub>𩇑（雷）の変形であろう）。そのうえで、司馬遷など古代の歴史学者はその神話伝説を歴史化させ、『淮南子』・『易経』など古代の天文・地理・哲学の編集者はその神話伝説を哲学化させるようになった。そのため、「黄帝后土」の歴史記載と「太極」・「陰陽相薄、感而為<sub>レ</sub>雷」・「回<sub>二</sub>雷<sub>一</sub>」生万物<sub>レ</sub>者也」などの哲学概念が生まれた。

雷神が善悪を司るという信仰は、雷神・龍信仰から出たのであり、その哲学と倫理道德の時代背景は農耕文化に属しているのである。言い換えれば、雷神が善悪を司るものとされるようになったのは、農耕文化の誕生とともに出来た神話を哲学化、倫理化した結果である。

### 三、日本の雷神信仰

日本の雷神信仰については記・紀に記載がある。

伊邪那美は、火の神を生みに囚りて、遂に神避り坐しき。

（記）

この火の神は雷神と考えられる。その雷神という本体は火の神が伊邪那岐に殺されたときに現れる。

伊邪那岐命、御佩せる十拳劍を抜きて、其の子迦具土神の頸を斬りたまひき。爾に其の御刀の前に著ける血、湯津石村に走り就きて、成れる神の名は、石折神。次に根折神。つぎに石筒之男神。次に御刀の本に著ける血も亦、湯津石村に走り就きて、成れる神の名は、瓊速日神。次に建御雷之男神。亦の名は建布都神。亦の名は豊布都神。次に御刀の手上に集まれる血、手俣より漏き出でて、成れる神の名は、閼於加美神。次に閼御津羽神。（記）

この石折神、根折神すなわち雷神である。閼於加美神と瓊速日神は岩波古典大系本倉野憲司氏の校注によると、前者が谿谷の水を掌る神であり、後者が「蔽めしく迅速な太陽神」である。筆者は後者を稲妻神であろうと考えている。

中国の雷神と同じように、ここでも、雷神・稲妻神・水神などは雷神の分身である。

そして、そもそも伊邪那美という偉大な母神の正体も雷神である。

頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰（ホト）には折雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、併せて八はしらの雷神成り居りき。（記）

日本神話での最大の人気者はスサノオであるが、このスサノオにも雷神の神格ははっきり現れている。

まずはスサノオは「海原」の神である。文字の通り、「海原」

は海であり、また、紀の本文と二つの一書には「海原」を「根国」と記載されている。これについては、松前健氏は柳田国男氏の「根の国の話」の論を受けて次のように論じている。根の国は元来地下ではなく、海のかなたにあると信じられた他界であった。ネという語は、生命の根源という意味で、祖霊の往くところばかりでなく、あらゆる生命の源泉地でもあったらしい（『日本神話の新研究』、桜楓社、一九六〇年、参照）。

両先学の説は大事な示唆を与えられた。農耕文化以前、太陽と水は人々の最も必要とするものである。それに対して、人々の最も恐怖するのが雷である。中国・西安の半坡の原始時代遺跡によると、当時原始民の最も崇拜していた神は雷神である。これは当然である。雷はいつも風雨雷電とともに現れたのであり、そして狂風により樹木が断ち切られるし、原始民の粗末な部屋を吹き倒す。暴雨により洪水がもたらされる。雷電は人の命を奪う。一言で言えば、雷はしばしば災害を引き起こすからである。

記・紀の「その（スサノオ）泣く状は、青山は枯山の如く泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき」という描写から雷神の恐ろしさがわかる。

従って、すくなくとも農耕文化以前の先史時代には人々は雷神を生命の神として、つまり天変地異（洪水や地震・火山爆発など）、人類の生死存亡を司る大神として崇拜していた。それは日中両国の神話だけではなく、世界中の国々の神話の共通な

現象である。

その上でわれわれは迦具土神（火神）・イザナミ（母神）・スサノオ（海原神）三者の関わりが理解できる。

要するに、これ三神の本来の神格は雷神であり、その以外の神格はみな後付加されたのである。松前健氏は指摘している。「イザナギ・イザナミ神話は、動物的な色彩は現在ではあまり見えないが、イザナミの死体に八種の雷神が誕生していたという記紀の伝承には、ふるく雷神が蛇体と観じられたという信仰を背景にして、龍蛇的な形が根底になかったとは言えない」（『日本の神々』、中公新書、一九八八年、三二頁）。

たしかにそうである。イザナミの蛇体は雷神の水神的性格（雷神の機能の一つ）と関わるばかりではなくて、また女神崇拜（衆知の通り、蛇・女陰は女神崇拜の象徴である）があったことを象徴している。雷神のこの進化過程は文化の発達過程と密接な関わりがある。母神イザナミの死亡と迦具土神（雷神）の殺されるのは、女神崇拜から男神崇拜への移行、採集漁獵文化より農耕文化に進化する鮮明な標記である（中国の雷神「黒龍」の殺されるのに似る）。これはスサノオが雷神とともに一つ一つの性格とも関係する。

スサノオは追放されて、出雲国の「肥上河上」、名は鳥髪という地に降りた。ここで八俣の遠呂智（「紀」には「八岐大蛇」）を斬り、また宮を造る。「其の足名椎の神を喚びて、『汝は我が宮の首任れ。』と告言りたまひ、且名を負せて、稲田宮

主須賀之八耳神と号けたまひき」と続く。

記のこの記載はスサノオの雷神的内性とスサノオの農耕神的内性との重層化を意味している。農耕文化以前、雷神の凶暴怪異は『龍田風神祭』の祝詞に「天の下の公民の作り作る物を、悪しき風荒き水にあはせつつ、成したまはず傷へるは」と述べられていることによく示されている。中国の雷神のように、この風神は雷神から派生されたのであるとも認めるであろう。こうした凶暴な性格と農耕文化における民衆に親しまれるようになってきた農耕神との重層化である。記載は非常に素朴自然なのであるが、稲・粟など農作物の誕生はスサノオが食物神を殺して生ったのである。ここはスサノオの本来の凶暴相を現したと同時に、スサノオの農耕神的性格を現した。スサノオの善悪背反の神格にとって、鈴木貞美氏にもう一つの角度から詳論がある。「八俣遠呂智はいかにも洪水の形象化であり、それを退治したスサノオが、稲田の擬人化である櫛名田比売と結婚することを併せて、稲作のための治水の神とすることはできる。しかし、スサノオは、もともと田の畦を壊したりする狼藉を働く神であり、洪水などの自然災害そのものの神格化と考えられる。スサノオによって殺された大気都比売の死体から五穀が生じる神話は、洪水によって新たにもたらされる芽吹きを意味するとの解釈も可能であろう。スサノオやその子孫によって『木種』が運ばれるのも、始源は洪水の後の芽吹きにあらう。この神が、台と檜杉を生やした八俣遠呂智——即ち山岳が、荒れ狂

うのを治める役割を果たすのは、災害をもたらす神が治める神に逆転し、一致する神話伝承に普遍的な現象であらう」(埴原和郎編『日本人と日本文化の形成』、朝倉書店、一九九三年、一七四頁)。

古代日本各地に流行っている祈神求雨の祭儀はスサノオのこの農耕神的性格と密接な関わりがある。国家農耕儀礼としての大嘗祭と新嘗祭と言えば、松前健氏の論述したように、「私は大嘗・新嘗の祭式に、水の行事がこれほど多く、またおまけに龍蛇信仰が、これにまといっているのは、ひょっとすると、農耕儀礼としての、もつと素朴な理由、即ち端的に言うると、一種の雨呪ではなからうかと思っている。庭燎や炬火、また大嘗祭斎場の焼却の行事などが、もし新しい太陽の出現を象徴する呪術であるとすれば、天子の小忌湯や御手水は、雨水を潤沢ならしめようとする呪術ではなからうか。雨乞の呪術には、普通龍王・龍神を祭り、雨中に呪物や神仏の像を浸らせ、或はそれらを洗い、または水をふりまくなど、色々な形式で、古来民間に行われている。単に手や体を清めるだけなら、そんなに何度も繰り返して行く必要はないはずであるし、また雷神・蛇神を尊重したり、天つ水をそれほど讃える必要もないわけである」(三品彰英編『日本書紀研究』第四冊、塙書房、一九七〇年、八五・八六頁)。

賀茂祭と新嘗について泉谷康夫氏の論述するのも大変示唆的である。「賀茂建角身(カモノタケツヌミ)命は、その名のカ

モは「神」、タケは「建」、ツヌミはツミ即ち「祇」を意味し、特殊な内容をもたぬ極めて普通のな神であると肥後（和男）氏は述べておられる。しかし、山頂に降臨する祖霊であり、雷神の父神であるところから、農耕神として祀られたものと考えてよいようである。ちなみに、現在でも田の神は山の神であり、同時に祖先神でもありとされている。したがって、御阿礼にはじまる賀茂祭は、水稻の播種もしくは田植に際して行われる田の神に対する農耕儀礼に源を発すると考えられる」と指摘している（三品彰英編『日本書紀研究』第一冊、三四・四〇頁）。一言で言えば、雷神は賀茂祭と密接な関わりがある。

また『西宮記』巻七裏書には、「延喜四年十二月十九日、此日佐衛門督藤原朝臣を使として、雷公を北野に祭らしむ」とあり、さらに元慶年中（八七七〜八八五年）に、「年穀のために、雷公を祈り、感応あり、因りて毎春秋、之を祭る」とある。

以上の論述から雷神の水神と農耕神の性格がよくわかる。また雷神は疫神の神徳をも持っている。

上田正昭氏によると、「疫神の信仰は平安時代以前にもあって、たとえば、宝亀六（七七五）年の六月、早害のおりに『使を遣はして疫神を畿内諸国に祭らしめ』たのがそれである（続日本紀）。この場合に注目されるのは、同年六月『黒毛馬を丹生川上神に奉る、早すればなり、それ畿内諸国の界に、神社の能く雲雨を興す者あれば、亦使を遣はして幣を奉る』と記載する点である。疫神はたんなる疫災の神ではなく、祈雨の神でも

あった。疫災をもたらす神は、ぎやくにその靈威の故に、雷雨神の性格をおびていたことがわかる。（中略）天満天神の信仰のなりたちには、雷雨神としての天神、疫神、そして御霊神、人神など、さまざまな背景があった」（上田正昭編『天満天神―御霊から学問神へ―』筑摩書房、一九八八年、一五・二二頁）。

ここは天満天神についての論述であるが、天満天神の前身としての雷神の神徳がはっきり見える。つまり農耕文化に入った後、雷神は単に降雨止雨の神徳を持っているだけではなく、中国の雷神と同じく招福除災・勸善懲悪を司る神徳をも持っていると考えられる。

### むすび

はじめに『日本永代蔵』と明代「話本」中の雷（雷神）を媒介としての因果物語を引用して、その雷神の源流をたずねた。

結論は、中国の雷神信仰は農耕文化以前に遡ることができる。その時代の雷神の主な神徳は「致風雨」である。農耕時代に入ってから、雷神信仰は龍信仰を生みだした。この段階の雷神信仰の進化とほぼおなじで、「龍」に加えて善悪を司る神格をもつに至る。雷神に関する『易経』などの哲学と倫理道德の時代背景は農耕文化に属しているのである。

中国の最古の神話記載である商代（前一七―前一一世紀）の甲骨卜辞と金石銘文に対して、日本神話の最古の文献は、衆知のように、約七世紀に編集された「記・紀」などであり、中国

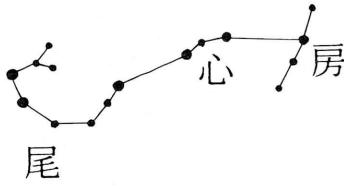


図1 辰馬。俗称「犁頭星」

神話の最古記載とは二千年以上の年代差がある。また衆知のよ  
うに、紀元前三世紀ごろ中国大陸から日本に稲作農耕が伝わっ  
て弥生文化が興った。したがって、文献中の日本神話は農耕文  
化以来の産物である。が、中国の雷神が持っている農耕文化以  
前の水神性格や農耕文化以来の善悪を司る性格などは、日本の  
雷神も持っている。

中国の雷神も日本の雷神も水神、農耕神、疫神であると同時に、  
生命の神、豊饒の神、善悪を司る神徳を持っている。

この共通の性格に関して、日・中両民族の雷神思想の授受影  
響の関係及び雷神思想の展開は、次の課題にしたい。

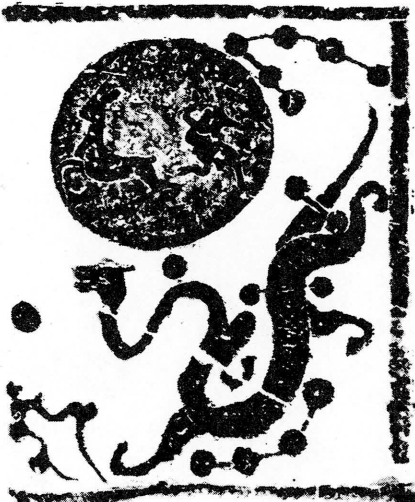


図3 軒輅の星座と龍 (石刻 南陽 1世紀  
『南陽西漢画像石』より)

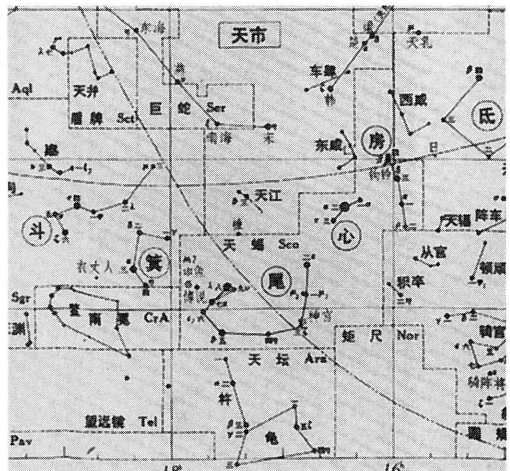


図2 房、心、尾の星座 (『考古』1975.3より)